

1. 授業の基本情報・概要

「日本語概説」は、1年次対象の「日本語学入門」の授業である。中学国語、高校国語の教員免許のための必修科目であり、国語免許の取得を目指す小学校サブコース、特別支援教育の学生も受講する。免許法上、「音声言語及び文章表現に関するもの」を内容に含む必要がある。例年、高等学校までの国語ではほとんど扱わない音声・音韻に重点を置いた内容にしている。普段気にすることのない音声・音韻について観察し、その仕組みを確認することは、母語を客観視するのに最もふさわしい領域であると考えからである。

本年度の受講生は45名で例年並みだったが、遠隔での実施という点が大きく異なる。また、渡日できなかった留学生が遠隔で受講したことは、初めての経験だった。この点の後で取り上げたい。

DP対応アンケートの回答者は31名、遠隔留学生の2名も回答してくれた。

2. コロナ禍での授業の取組

第1回のガイダンス及び導入(言語とは)は、対面で実施したが、第2回以降は遠隔での実施となった。留学生へのガイダンスは別に行い、留学生も第2回から受講した。前半の授業内容が音声・音韻であることから、実際の発音を確認する場面を想定し、遠隔同期型での実施を希望した。第1Qは全体が原則遠隔だったことから、遠隔同期型で実施できたが、第2Qからは対面が可能となったため、遠隔同期型で実施したものを録画してムードルにアップするかたちをとった。幸いなことに、音声・音韻は第1Qだったので、関係する音声をあらかじめ発音しておくことは回避できた。もちろん、音声・音韻であっても遠隔非同期で実施できなくはない。本授業でも、参考となる音声関係資料をアップしたりもした。ただ、渡日できない留学生からすれば、リアルタイムでない授業を視聴するだけでは、とても留学とはいえないと私は想像し、留学生のために、遠隔同期型を実施し

た上で、前後に対面授業のある本学学生に迷惑にならないように録画してアップした。留学生3名のうち一人は法文学部への留学生で、前期で帰国したが、教育学部への2名は私自身が受け入れ教員であり、この一年間、この授業以外の授業もいくつも受講し、非常に優れた成績を収めた。遠隔留学だったにも関わらず、先日、対応について感謝の言葉をくれたのはうれしかった。

3. DP対応アンケートの結果

DP対応の学生授業評価アンケートの結果を以下に挙げる。1「とてもそう思う」、2「ある程度そう思う」、3「あまりそう思わない」、4「無関係」。

	1	2	3	4
DP 1 知識	10	18	03	00
DP 2 技能	07	20	03	01
DP 3 思考・判断・表現	06	15	07	03
DP 4 興味・関心・意欲、態度	08	20	01	02

この授業は1年次対象の「日本語学入門」であるから、DP3, DP4の評価が少し下がるのはある程度しかたのない面もあるが、DP1, DP2で3「あまりそう思わない」が3名ずつ(同じ3人)、DP2で4「無関係」が1名いたことは反省点である。普段意識しない母語の仕組みについて学ぶことが国語科の教員として必要であり重要であることが伝わっていない。「母語である日本語を一つの言語であるにとらえられるようになる」のも、「何かができるようになる」ことの一つであるのに、そうはとらえてくれていない。一言語としての日本語が実感できるような授業に改善していかなければならない。

時間外学習・課題	1.95 時間
時間外学習・自発	0.80 時間
自発的読書・論文	1.26 冊
自発的活動	0.10 件

授業外学習課題	0.95 時間
授業外学習自発	0.43 時間
自発的読書	0.29 冊
自発的活動	0.07 件

今回のアンケートで驚いたのは、時間外学習が予想より長かった点である。参考までに同じ「日本語概説」について報告した2017年度のアンケート結果を挙げる。時間外学習の時間はほぼ2倍になり、自発的に読んだ書籍・論文数も大きく増加している（こちらについては、2017年度の数値が小さ過ぎたこともある）。

時間外学習が増加した理由を考えてみた。

まず、授業改善の成果だろうか。これについては毎年、前年度の反省の上に立って、より興味を持てるようにと努力はしているつもりであるが、それが大きな要因であるなら、DP対応の問いへの答えが改善しているはずである。実はそちらはほぼ同じで良くなっていない。つまり、時間外学習の増加は授業改善の成果とは言いづらい。

原因・理由として大きいのは、授業形態ではないか。対面での授業は、受講生に受講したという実感を与え、それは「安心感」となってしまうのではないか。遠隔の場合、今回は同期型だったが、「安心感」が醸成されず、授業を本当に受けたのかという「不安感」が受講生に生まれたのではないか。時間外学習によってその「不安感」を小さくしようとしたのではないかと想像する。この点については、それを裏付けるアンケート項目を付加すればよかったのだが、集計の段階で気づいたことであつたためできなかった。

もう一つは、これは大きな変化をもたらしたわけではないが、遠隔留学生の存在である。アンケートに回答してくれた二人のうち一人は遼寧師範大学の大学院生で、日本語の待遇表現に関わる修士論文を執筆中だった。極めて日本語能力が高く、日本語を学ぼうとする意欲もずば抜けている。もう一人は天津外国語大学日本語学科の4年生であり、こちらも日本語能力は高く、日本語への興味関心も極めて高い。彼ら2名によって、数値が跳ね上がったわけではないが、本・論文数については、大学院生の回答は9で、これを除くと全体で1.0冊になるから、一人でかなり上げたともいえる。また、授業において、私はいく

つかの場面で「中国語ではどう？」という質問をした。それによって日本人受講生への刺激にしようと試みたのだった。少なくとも、彼らが応対で用いた流暢な日本語は、真面目な日本人受講生を驚かせたに違いない。このことは、これらの数値に若干はプラスに働いたのではないだろうか。検証はできないが。もしいささかでもプラスに働いたなら、遠隔非同期でなく同期で実施したことの良かった点といえよう。

また、教員を目指す者なら誰しも興味を持つようなYouTubeを紹介した。そのYouTubeは子どもの成長と言葉の習得に関係するものだったので、その前後を視聴し、それを時間外学習時間に入れたのかもしれない。

受講生を「不安」にはしてはいけないが、授業は出さえすればいいものではない。今回は検証ができていないが、いくつも今後の改善につながりそうな要素が見出せた。

4. 次年度に向けて

本授業は、中学・高校の国語教員免許の必須の科目である。それゆえ、小学校サブコースの学生であっても国語免許の取得のために受講してきた。しかし、義務教育特例の実施によって、この科目は小学校免許の科目にも加わることになった。従来から、小学校教員になる学生にとっても有益なものをと意識を持って内容も吟味してきたが、今後は、さらにそれを積極的にやりたいと思っている。そうすると、「初等国語」との関係が微妙になる。現在、「初等国語」は、小学校教員を目指す者にとっての唯一の国語の内容学の科目であり、私は15回のうちの6回を担当している。「初等国語」は取っても、「日本語概説」は取らない学生は当然多い。前者は130名、後者は50名弱である。「日本語概説」が初等の科目に加わることで、二つの受講生数がどう変化するのか。そのことによって、扱う内容をどう振り分けていくのか。まずは、次年度の1年次対象の「日本語概説」の受講生数に注目したい。そして、次年度、授業を対面で実施できるのか、遠隔のままなのかも重大である。対面であっても、しっかりした時間外学習をして、しっかりと定着させていきたい。定着させたいのは、母語である日本語を客観的に見直すことを大切に感じる意識である。